

# 酒井田柿右衛門の作家活動に関する情報収集について

## On the collection of information relating to the artistic activities of Sakaida Kakiemon

濱川 和洋

九州産業大学

Kazuhiro Hamakawa

Kyushu Sangyo University

Key words: 15th Sakaida Kakiemon, Kakiemon style porcelain, Digital archive

### 要旨

本研究では、十五代酒井田柿右衛門が作家として考え方や作風を確立していく過程を記録に残し、作家活動の長期的な追跡調査を行っている。現在までに延べ10回の調査を行い、ギャラリートークの記録と展示図録の収集を行った。ギャラリートークには記録不要な情報も多く含まれることから、収集した情報を整理していく必要があると考えられる。十五代の意識の変化については、比較的ギャラリートークの最初の導入部で語られることが多いため、今後は導入部での発言の変化をまとめて検証していく必要があると考えられる。

### Summary

In this research we are conducting short and long term surveys of the artists' activities in order to keep a permanent digital record of the artistic ideas, processes and style of Kakiemon the 15th. We conducted ten surveys so far and have gathered gallery talk records and exhibit catalogs. During the digitization of these talks we noticed lots of unnecessary information which we edited out of the final recordings. In order to make these recordings into a more coherent final product we plan on organizing the recordings into sections based on "work up till now", "present work" and "future work".

### 1. はじめに

伝統みらい研究センターは、九州の伝統産業の技術伝承のあり方および知恵を明らかにするとともに、その知見を地域活性化のために活用し、日本の未来のものづくりに寄与することを目的に設立された。そのため、伝統工芸が抱えている課題に対して、技術伝承のあり方の研究のみならず、マーケティングやデザイン、商品戦略等を多面的に調査研究し、問題解決策を提示するという九州の伝統工芸を基とした地域全般の「シンクタンク」となることを目指している。その中で柿右衛門研究部門では、前身の「柿右衛門様式陶芸研究センター」における研究成果とネットワークを活かしながら、柿右衛門研究の世界的拠点を形成するべく、十五代酒井田柿右衛門の作家活動を長きにわたって継続的に記録に残すとともに近代柿右衛門のアーカイブ化を進めている(図1)。

現段階では、本格的な追跡調査を始めてから1年に満たず収集した資料が少ないため、本研究ではこれまでに行った調査の経過について述べる。

### 2. 土合帳にみる柿右衛門家の技術伝承

現代の柿右衛門を象徴するものとして温かみのある乳白色の素地「濁手」があるが、これは戦後柿右衛門窯の経営の立て直しを図る中で、十二代と十三代親子が古文書の「土合帳(図2)」をもとに復興させたものであり、この古文書を書き遺したのは五

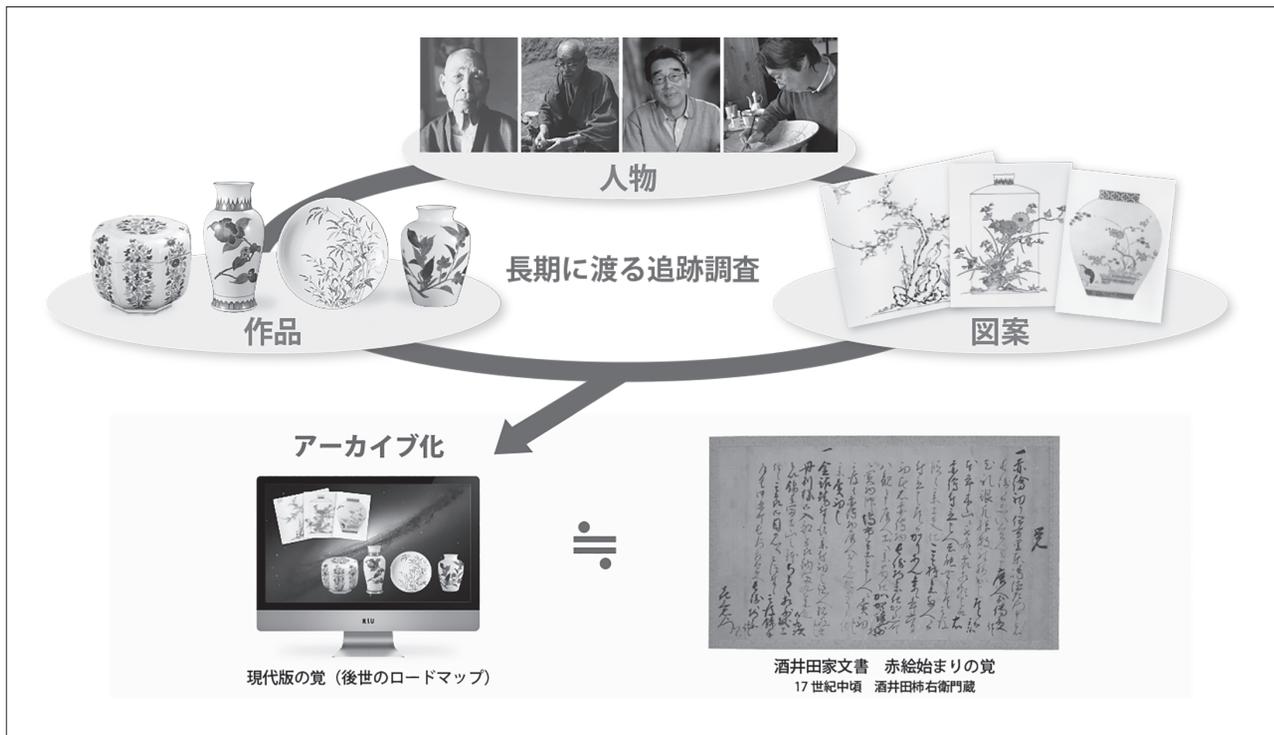


図1 近代柿右衛門のアーカイブ化のイメージ

代柿右衛門と言われている。五代は土合帳の他に「赤絵具覚」、「他見無用集」を1690年（元禄三年）に書き遺しているが、歴代柿右衛門の生没年をみると（表1）、五代は1691年（元禄四年）に31歳で亡くなっており、残された六代は1歳であったことから、五代はまだ幼かった六代に技術を伝え遺そうとして「文書」を書いたものと考えられる。五代の時代に柿右衛門様式が有田の一時代の流行様式となり、柿右衛門窯は隆盛を極めたが、18世紀に入るとオランダ東インド会社による肥前磁器の輸出量が減少し国内の不況などの影響を受け、乳白手（濁手）は十二代と十三代親子が復興するまで忘れ去られた存在であった。1950年（昭和二十五年）に文化財の保存・活用と、国民の文化的向上を目的とする文化財保護法が制定され、十二代が当主の時代に洪雄（後の十三代）が中心となり、濁手復興をおよそ三年がかりで成し遂げた。1953年（昭和二十八年）には、「初代柿右衛門三百年祭」の際に濁手作品を出品し、1955年（昭和三十年）に記録作成等の措置を講ずべき無形文化財に選択された。さらに1971年（昭和四十六年）には、十三代を会



図2 土合帳 酒井田柿右衛門蔵<sup>1)</sup>

長する各工程の特に優秀な技術者で構成された「柿右衛門製陶技術保存会」を設立し、国の重要無形文化財「柿右衛門（濁手）」として総合指定を受け現在に至っている。つまり、五代の「文書」が現代の柿右衛門の礎を築き、柿右衛門窯を守ることにつながったと考えられる。

現在当主の十五代は49歳で十六代予定者の拓丸は7歳である。十五代が柿右衛門を襲名した45歳に十六代がなるころには、十五代は87歳ということになる。十五代と十六代が一緒に仕事ができる期間が限られているということは明らかであり、十五

表1 歴代柿右衛門の生没年

初代	1596 - 1666		十一代	1839 - 1916	
二代	1620 - 1661		十二代	1878 - 1963	
三代	1622 - 1672	二代の弟	十三代	1906 - 1982	
四代	1640 - 1679	三代の子	十四代	1934 - 2013	
五代	1660 - 1691	年齢差 30歳	十五代	1968 -	年齢差 43歳
六代	1690 - 1735		十六代	2011 -	

代も『十六代はまだ小さいんで、いままでどおりにやっていたんじゃちょっと間に合わなくなるかなと思います。成人するまでにはひと通り何でもできるようにしとかなきゃダメかなとは思ってます。私もいつまでも生きてるわけではないですから』<sup>2)</sup>と述べている。江戸時代とは全く時代背景が異なる現代では、書籍やデジタルデータ等で豊富な情報を記録し劣化なく保存することができる。しかし、作家としての考え方や作風を確立していく過程は、長期的かつ継続的に作家活動を記録し続けなければ明らかにならないものと考えられ、その変遷を辿ることでみえてくるストーリーや人間像は、十六代をはじめとした後の柿右衛門たちのロードマップとなる可能性が考えられる。

### 3. 錦手と濁手にみる十五代らしさの探索

「柿右衛門」という立場は窯元の経営者という以外に陶芸作家という顔があるが、作家活動を始めたのは濁手を復興した十二代の時代からである。現在の柿右衛門窯では、窯物と呼ばれる「錦手」と作家物と呼ばれる「濁手」が明確に区別され制作されている。「錦手」は食器を中心とした実用品であり、染付を伴う伝統的文様が絵付されることが多く、高台内に染付で「柿右衛門」の銘が書き込まれる。一方、「濁手」は壺および鉢、香炉など美術品として当代の個性的な文様が絵付されることが多く、釉薬の性質上染付を伴わず銘は書き込まれない。有田では伝統的に分業制作が行われてきており、柿右衛門窯でも各制作工程に3～4人、全体で37人の職人がそれぞれの持ち場で仕事をしている。当主が職人集団を率いて、複数の職人で一つの作品を作るとい



図3 墨書きの様子<sup>3)</sup>

う点では「錦手」と「濁手」どちらも同じであるが、職人の中でも特に優れている技術者と協力して作り上げるのが濁手作品である。十五代は柿右衛門窯の命とも言える職人の高度な技術を維持していくために、職人を使いながら濁手作品を制作している。その中で、器形のデザインや瓢筆墨を使った墨書きなど(図3)、デザイナーや一職人としての役割も担いつつ、全ての工程を監督するプロデューサーとしての役割も担っている。多くを語らずとも意思疎通ができる職人との関係性を築いていくことが重要であることは言うまでもないが、柿右衛門様式という枠組みの中で、各代それぞれの作品に個性が求められるため、現在は十五代らしさを模索している段階であるとされる。

### 4. 調査について

本研究では十五代が関わる展示会全てを調査対象としているが、十五代が作品解説等を行うイベントがある個展・展覧会を中心に録音または筆記による発言内容の記録を行うとともに、展示図録の収集を行っている。本研究でこれまでにを行った調査は、平

表2 これまでの調査

調査日時	展示名	場所	ギャラリートーク
2015.3.8	【福岡】国際シンポジウム 世界の「アリタ」 - 有田焼の伝統と未来に続く創造性 -	九州国立博物館ミュージアムホール	講演及びパネルディスカッション 13時～16時20分
2015.3.8	【福岡】トピック展示 柿右衛門 受け継がれる技と美	九州国立博物館文化交流展示室	無し
2016.7.5	【広島】【有田焼創業400年記念】 十三代今右衛門・十四代柿右衛門展	広島三越 8階催物会場	トークイベント 7.5_14時～60分
2016.9.22	【佐賀】特別企画展 「人間国宝と三右衛門」	九州陶磁文化館	9.22_14時～
2016.10.5	【福岡】【有田焼創業400年記念】 十三代今右衛門・十四代柿右衛門展	福岡三越 9階「三越ギャラリー」	トークイベント10.5_11時～ ギャラリートーク10.9_14時～
2017.3.25	【広島】「襲名記念」 十五代酒井田柿右衛門展	福屋八丁堀本店 7階 美術画廊	3.25_14時～
2017.6.11	第52回西部伝統工芸展	福岡三越9階＝「三越ギャラリー」	6.11_12時～
2017.9.3	【宮城】「襲名記念」 十五代酒井田柿右衛門展	藤崎 本館7階 催事場	9.30_14時～
2017.10.28	【静岡】「襲名記念」 十五代酒井田柿右衛門展	遠鉄百貨店 本館8階 催会場	10.28_14時～
2017.10.29			10.29_14時～

成 27 年 3 月から延べ 10 回であるが、本年は 4 箇所で行われた展示会図録の収集と 5 回分のギャラリートークの記録を行った（表 2）。

場所や展覧会のテーマによって話の内容は変化するが、これまでの個展で十五代のスピーチ内容を要約して分類すると、概ね以下の五つに分類される。

#### ①襲名した頃

- ・十五代が思っていたよりも十四代の具合が悪くなるのが早く、急遽代替わりすることになり右往左往したが、昔のことを知っている職人やスタッフに助けられながら仕事を始めた。
- ・襲名して半年後に東京で個展をしたが、作品がなかなか揃わず制作が大変だった。方向性もわからず作風も固まっていなかった中の初個展で不安だった。

というような襲名時の事項や心理等についての内容。

#### ②赤絵の始まりから幕末まで

- ・色絵時期の始まりについては、初代が書いた「赤絵始まりの覚」に詳しく書いてある。1644 年頃に明末清初の内乱が起き、景德鎮窯からのヨーロッパ向け磁器の流通が途絶え、オランダ東インド会社は日本に代替品を求めた。そのころ、伊万里の陶商東嶋徳座衛門が長崎に行き「しいくわん」という明の人物に金を払って赤絵の技

術を習い、初代柿右衛門に伝えたところから開発が始まった。最初は赤絵付けを試みるもうまくいかなかった。その後、呉須権兵衛とともにだんだん工夫して赤絵に成功した。1647 年には、長崎の港で加賀藩の買物師塙市郎兵衛に初めて焼き物を売り、長崎にいた唐人やオランダ人に売り始め貿易が始まった。この最初に売った年を柿右衛門窯では赤絵の始まりの年としている。

- ・輸出が始まってから、オランダ東インド会社の厳しい注文に応じていくうち、いわゆる柿右衛門様式というスタイルに近づいていき、1670 年頃に柿右衛門様式が確立した。四代や五代の頃である。現在は、その 1670 年代の焼き物を手本にしている。その後、清が輸出を再開して流行が変わっていき、六代や七代の頃には金襴手様式を作り、その後も時代に合わせた焼き物を作ってきた。

というような初代から七代頃までの柿右衛門が確立する過程を説明するような内容。

#### ③濁手復興と近代柿右衛門

- ・戦後窯の復興のために、五代が書き残した「土合帳」と「赤絵具覚」をもとに十三代が中心となって 17 世紀の柿右衛門様式を再現した。再現したものを濁手というが、佐賀県の方言で「にごし」

は米のとぎ汁のことで乳白色またはやや濁った白色のことを指している。このころから民藝運動などの影響もあり、作品に濁手という名前を使った作家活動が始まった。

- 十二代は「昔ながらの美術を極めて後世に渡す」という伝承の意識が高い職人氣質な人物で、窯の経営には無関心なところがあった。作品は染付や線書きが主で、素地は多少歪みがある“おおらか”な作品が多く、現在の錦手のトレードマークになっている柿文のデザインも十二代が考えたものである。この頃の器の歪みや鉄分によるシミは、当時“味”として許容されていたが、現在の柿右衛門窯の基準では販売できない。現在は当時に比べ良い原材料を使っており、品質を重視している一方で、原材料の不純物を取り除きすぎているようにも感じる。
- 十三代は十五代が中学生の頃に亡くなり記憶は多くないが、浄瑠璃が好きだったので、宴会等で十三代の弟が三味線を弾き、十三代と二人で浄瑠璃をやるなど、十二代とは正反対に豪快な性格の持ち主だった。作品も、形式にとらわれない自由な発想で制作することが多く、絵付けのモチーフにはユニークな題材が使われ、色も作品によってばらつきがある。職人氣質な十二代とは仕事上でよく喧嘩をしていたが、太平洋戦争により職人に給料を支払えないほど経営が悪化していた頃、十二代と協力して柿右衛門様式全盛期の頃の濁手を復興させ、廃業の危機を乗り越えた。十三代はロクロが好きで、絵の具の計量は秤を使用しないこともあるほど大らかだったので、十二代は十四代に絵の具のノウハ

ウを教え込んだ。

- 十四代はおよそ30年間柿右衛門を務めたが、襲名前の期間が長かったこともあり、襲名前に自分のスタイルを確立していたため、襲名後の作風に大きな変化はみられない。ただ、若い頃は太い線と細い線が混在する勢いのある線を引いていたが、襲名後は繊細な線に変化しており、柿右衛門様式の雰囲気損なわないようにする意識が強く感じられるものに変化した。絵がメインではなく、器の形を美しく見せるために絵で化粧をするという考えのもと制作していた。十四代は、普段はあまりしゃべらず、仕事以外で会話をすることがほとんどなかった。

というような戦後の歴史と十二代および十三代、十四代の人間像についての内容。

#### ④原材料と技術

- 色絵にこだわって仕事をしているが、赤の色は特に大切にしている。昔は、岡山県の吹屋から一番良いベンガラを取り寄せ、水を張った甕の中にベンガラの粉を入れ十年ほど寝かせて、攪拌して水が透明になったら上澄みを捨てるという、水溶性の不純物を取り除く作業をする。それをさらに細かく摺って攪拌し、粒子が最も細かい上澄みと陶石や陶土と混ぜ合わせて作るのが「花赤」という色。花赤が一番作るのが難しく大変である。次に細かい粒子の部分は、「濃赤」という黒みの強い赤になり、染付の柿文様の柿の部分に使っている。さらに下の方にある粒子を線描きの赤に使っている。緑はモヨギと言うが、十四代は不純物が混ざっている昔の銅板で作る色は味があるからと、民家を壊したときな

どに出てくる古い銅板を集めていたので、それを使用している。昔ながらの材料を使うことによって技術の保存にも繋がるため、次の世代で材料がなくならないように材料を集めておかななくてはいけない。

- ・次にこだわっているのが技術であり、初代から一貫して分業制という体制で仕事をしている。分業制を守るのが当主の大事な仕事の一つ。一度途切れた技術は戻らないため「職人を絶やさない」ということが重要。現代には、江戸時代にはなかった電気があるが、一つ新しいものが入ってしまうだけで、知らず知らずの間に技術が失われてしまうこともあり得るので、できるだけ昔の仕事のスタイルは壊さないようにして次に繋げたい。

というように今感じている原材料についての危機感や仕事のこと。

#### ⑤作品解説

- ・一番最初に作ったのが「団栗文」の作品。モチーフを考えたときに、子供の頃から身近だった団栗が一番に頭に浮かんだ。最初は、団栗の実が赤いような感じはするものの赤ではないので、柿右衛門様式の絵に団栗を描いていいものか迷いがあったが、仕上がったときに意外にも違和感がなかったのでずっと描き続けている。試しに描いたのが最初であったが、自分の原点は団栗かなという気がしている。
- ・作品名として唐梅という名前を使っているが蠟梅を描いた作品がある。このモチーフは、春の公募展に出典する作品のモチーフを探していたところ、庭に咲いていて花の質感と直線的な枝

ぶりの造形が面白く感じ描くことにした。柿右衛門といえば赤というイメージがあるが、赤を入れると違う花のように見えたことから実物と同じ黄色い花にして赤を使わなかった。花を黄色にすると目立ちにくいため、枝など他の部分の色を抑えた色調にする必要があった。出展は非常に不安だったが、審査員の評判が良かったこともあり続けて作っている。

- ・自分の作風がまだ備わっていないので、様々な形の器にシンプルな構図で自分が作ったモチーフを構成していくというスタイルで仕事をしてきた。十四代が5年毎にモチーフやデザイン等を大きく見直しながら制作していたので、襲名5年目には、新しい作風を探りたい。
- ・柿右衛門様式は窯の仕事としてやって、自分の作品は思いついたものを描いていくスタイルで2つを分けてやっていきたい。今はオリジナリティを追求し、晩年にかけて伝統的な柿右衛門様式にシフトしつつ次の代にバトンタッチしたい。

というような作品のモチーフや今後の展望についての内容。

現段階では、ギャラリートークの記録と展示図録の収集を行い、デジタルデータとしてただ保存しているに過ぎず、今後長期的に情報を蓄積していくことを考えると膨大な量になることは明らかであるため、保存すべき情報を取捨選択していく必要がある。作品に関しては、収集し得る限りの作品の画像をデータベースに収録していきたいと考えるが、ギャラリートークなどの話には、記録不要な情報も多く含まれることから発言内容をセクションごとに整理

し、「十五代が現在まで何を考えて、これからどうしていくのか」ということを抽出するとともに、時系列に保存していく必要があると考える。

### 5. 十五代を継続的に調査すべき要素について

「4. 調査について」で分類した内容をそれぞれ見てみると、「①襲名した頃」は、ギャラリートークの導入部分にあたるが、来場者の興味を引きつつ、話に馴染みやすくするために最近の出来事や近頃考えていることなどを語る可能性が高い部分である。現在の個展は襲名して間もないこともあり、ギャラリートークの始めに襲名前後のことが語られることが多いが、十五代の個展や制作に対する意識など心理的な情報を得られる可能性が考えられ、収集する重要度は高いと考えられる。「②赤絵の始まりから幕末まで」、「③濁手復興と近代柿右衛門」は、現在の濁手作品を理解するために必要な情報ということもあり、語られることが非常に多い内容ではあるが、過去の出来事として記録されている情報がほとんどなので、収集する重要度は低いと考えられる。「④原材料と技術」は、柿右衛門窯の核とも言える部分であり、②③と同様に語られることが多い内容であるが、原材料が枯渇したとき、或いは優れた代替品が発見されたときに情報が更新される可能性があるものの、当面は内容が変わらないものと考えられ、収集する情報としては重要度が低いと考えられる。「⑤作品解説」では、通常3～4点の作品をピックアップし「モチーフを選んだ理由」や「描き方のこだわり」など、作品に関して十五代が考えていることや今後の展望について語られることが多く、作風の変化を裏付ける情報を得られる可能性が考えら



図4 錦草花文皿<sup>4)</sup> (1970年) 酒井田正作



図5 錦山つつじ文花瓶<sup>5)</sup> (1978年) 酒井田正作



図6 濁手小手毬文八角大皿<sup>6)</sup> (1985年) 十四代作

れ、収集する情報として重要度は極めて高いと考えられる。

十五代の意識の変化については、客観的には記録することが難しいが、比較的ギャラリートークの最初の導入部で語られることが多いため、今後は導入部での発言の変化をまとめて検証していく必要があると考えられる。十五代は来年2月に襲名5年目を迎えるが、この5年を一区切りとして、ギャラリートーク導入部で語られる近況「これまで」と、作品の解説の中で語られる「現在」および「これから」に着目したい。今後、発言内容を抽出し整理していく中で、編集者のフィルターを通して内容が変質しないように注意する必要があるが、具体的にどう編集していくかということについては今後の課題としたい。

## 6. おわりに

十四代が襲名前の若かりし頃に制作した「錦草花文皿（図4）」がある。この作品は黒や赤の輪郭線を描かないという点で柿右衛門様式の枠組みから外れるものであり、実験的作品とはいえ、一作家としての個性や自分らしさを追い求めて葛藤している様子が表れているように思える。その後制作された作品からは徐々に格式高い様式と向き合いながら、本来の様式の美しさを理解しつつ、自分のものになっていくに連れて、様式の制約から大きく外れることがなくなっている。そして、その制約の範囲内で自分らしさを表現し、作風を確立して行く変遷をみることができる（図5、図6、図7）。

かつての十四代がそうであったように、十五代は従来の柿右衛門様式の制約に強く縛られることな



図7 濁手桜文八角鉢<sup>7)</sup>（2000年）十四代作

く、実物に忠実な色とスケールで「団栗文」や「唐梅文」を描いてきた。赤がない作品に対して来場者から意見されることもあったというが、十三代も近代的な独自の文様を描き始めた時、古典を蔑ろにしていると批判されたことがある。常に完成された先代と比較される重圧の中、自分の独自性を築いていく十五代のモチーフに対する真っ直ぐな姿勢に今更ながら敬服させられる。図8に示す団栗文の作品は、上が初期のもので下が近年制作されたものであるが、作品に対する意識の変化が徐々に現れ始めている。このことについて十五代は以下のように述べている。

『団栗はですね、赤っぽい気はするんですけど赤じゃないんですね。柿右衛門様式の絵に団栗を描いていいのかなみたいな感じでですね。最初は迷いながらデザインをしたんですけども、最初に絵をつけてみた時に、意外と違和感がなかったもんですから、それからずっと絵をつけるようにしてました。そして、最近葉っぱのサイズが小さくなっていますけども、最初はですね、結構リアルな比率というかですね、かなり大きく葉の部分を描いていましたの





图8-1 濁手团栗文六角壺<sup>8)</sup> (2015年) 径23.2×高39.2cm



濁手团栗文六角壺 部分拡大



图8-2 濁手团栗文壺<sup>9)</sup> (2017年) 径27.0×高41.0cm



濁手团栗文壺 部分拡大

で、バランス的に赤の部分が少なくなりまして、今までとだいぶ違う色になりましたねと言われることが多かったんです。でも最近少しこう、赤にこだわった作品なので、少し赤を綺麗に見せたいということで、前はですね団栗の実のところを黒線で描いたりして、本物のどんぐりに近づけようとする試みなんかもしてたんですけども、最近は赤線を使うようにしまして、あの赤の色が濁らないようにということをはがけて仕事をしています。(2017年10月28日遠鉄百貨店)』

近頃は、展示図録に載っていない伝統的な雰囲気を含んだ実験的作品が展示されることがあり、5年目に向けた準備も着々と進んでいるように感じられる。新たな十五代の世界に期待しつつ、今後も継続して個展・展覧会の記録を行っていきたい。

## 注

- 1) 一般財団法人柿右衛門文化財団・日本「江戸前期—柿右衛門とその歴史」<http://kakiemon.or.jp/kakiemon/history.html> (2018年3月14日)より転載
- 2) 参考文献 [5] の p.207 より引用
- 3) 参考文献 [10] の p.8 より転載
- 4) 参考文献 [7] の p.72 より転載
- 5) 参考文献 [7] の p.73 より転載
- 6) 参考文献 [7] の p.86 より転載
- 7) 参考文献 [7] の p.94 より転載
- 8) 参考文献 [7] の p.104 より転載
- 9) 参考文献 [10] の p.15 より転載

## 参考文献

- [1] 有田焼継承プロジェクト編 (2016) 「有田焼百景 - 談話「永遠のいま」と生きる有田」ラピュータ
- [2] 井村欣裕 (2002) 「歴代柿右衛門 (増刊「緑青」(Vol.2))」, マリア書房
- [3] 井村欣裕 (2005) 「近代・歴代柿右衛門〈2〉 (増刊緑青)」, マリア書房
- [4] 井村欣裕・十四代酒井田柿右衛門 (2013) 「歴代柿右衛門3」, 京美出版
- [5] 酒井田柿右衛門 (2015) 「遺言 - 愛しき有田へ」白水社
- [6] 酒井田千明 (2015) 「柿右衛門窯の歩み—歴代柿右衛門とその作品—」, 『柿右衛門—受け継がれる技と美—』 pp.72-83, 九州国立博物館
- [7] (2015) 「有田焼創業 400 年記念 十三代今右衛門×十四代柿右衛門展」 (展覧会図録), 広島三越
- [8] (2017) 「襲名記念 十五代酒井田柿右衛門展」 (展覧会図録), 福屋八丁堀本店
- [9] (2017) 「襲名記念 十五代酒井田柿右衛門展」 (展覧会図録), 藤崎
- [10] (2017) 「襲名記念 十五代酒井田柿右衛門展」 (展覧会図録), 遠鉄百貨店